研究論文

イングランド北部英語における母音の諸特徴*

～リバプール，マン島，プレストン，ブラッドフォードを比較して～

三浦 弘
専修大学

要旨

イングランド北部 4 地域で英語方言の現地調査を行って収録した音声を分析し，各地域方言に見られる母音の特徴について報告する。(1)「NURSE 母音と SQUARE 母音の融合」は，リバプール英語の特徴と言われているが，実際に完全に融合していた。それも訛りの強い話者の音素は /ɛː/，訛りの軽い話者の音素は /ɜː ~ ɛː/[1] と分けられた。この融合はプレストン(ランカシャー)にも見られた。(2)「THOUGHT 母音と NORTH 母音と FORCE 母音の融合」は，リバプールでは CURE 母音までも含めて円唇後舌半狭母音 /oː/ で融合していたが，その傾向はマン島とプレストンでも同様であった。ブラッドフォード(ヨークシャー)でも融合していたが，その音素は後舌半広母音の /ɔː/ であった。(3)プレストンとブラッドフォードの NEAR 母音は現在でも 2 音節の母音とみなせると思われる。第 1 要素が長く，第 2 要素のシュワーが短い。プレストンの音素は /iːə ~ i(ɹ)/ で，ブラッドフォードは /iːə/ だけであった。(4)CURE 母音では，プレストンの音素は /uːə ~ ʊə ~ oː ~ u(ɹ)/ で，ブラッドフォードの音素は /ɔː ~ ɑː ~ ɜː/ であった。

キーワード：NURSE 母音と SQUARE 母音の融合，第 1 次 FORCE 母音の融合，第 2 次 FORCE 母音の融合，R 音変種，非 R 音変種

1. はじめに

2017 年 9 月にアイリッシュ海にある英王室保護領のマン島 (the Isle of Man) とリバプール (Liverpool) にて，また，2018 年 8 月から 9 月にかけてランカシャーのプレストン (Preston) とヨークシャーのブラッドフォード (Bradford) にてイングランド北部英語方言の音声調査を行った。現地にて地元出身の適切な被験者(他の地域で暮らしたことのない高齢の男性)から音声の提供を受けた。ヨークシャーでは初めはリーズ (Leeds) での収録を試みたが，なかなか被験者が見つからず，ブラッドフォードに移動しての録音となった。ブラッドフォードの被験者たちの年齢は高齢とは言えないが，その地域の発音変種をしっかりと保持していた。

語彙リストの音読(単語をキャリア文に入れて音調核が目的の母音に来るようにしたもの)と短文の音読と自然な会話を収録した。母音に関してはその音声を音響音声学的手法(母音のフォルマント周波数を用いた音響ダイアグラムの作成や分節音の持続時間の計測等)で分析した。本稿では各収録地点の地域方言特有の母音音素に焦点を当てて，母音の融合 (merger)，二重母音 (diphthong) か単一母音 (monophthong) か，あるいは，英米の標準的な英語では単音節 (monosyllabic) となっている母音音素が地域方言では 2 音節 (disyllabic) となる母音音素について考察する。

* 本研究は JSPS 科研費 JP17K02821 (2017–19 年度) の助成を受けたものである。また，本研究のための現地調査において，ポール・カーリー氏 (Paul Carley, PEPSJ 顧問, Fakeeh College for Medical Sciences) の協力を得た。ここに記して謝意を表したい。

[1] ティルダ記号 (~) は英語音声学では “or” の意を示す (Wells, 1982, p. xviii)。

母音の融合や二重母音とかかわりの深い R 音性 (rhoticity) に関して，イングランド北部英語ではランカシャーとその周辺地域だけが R 音変種 (rhotic) である (Upton & Widdowson, 2006, p. 42, Map 15)。リバプールやマン島を含むほとんどの地域が非 R 音変種 (non-rhotic) であるが，本稿の被験者の中では，マン島の 1 名とプレストンの 2 名が R 音変種の話者であった[2]。

2. 調査方法

2.1 キャリアセンテンスと語彙リスト

被験者に語彙リストを提示して，各語を (1) のキャリアセンテンスに入れて，2 回ずつ音読してもらった。分析には 2 回目の音声を使用した。語彙リストには英語方言調査の「標準語彙セット」(the standard lexical sets, Wells, 1982; Foulkes & Docherty, 1999) の 73 語に加えて，事前の文献研究から地域ごとに独自に選択した約 80 語を含めた。

(1)　Say _____, please.

2.2 録音機器

収録には，ポータブルレコーダーとプラグイン・マイクロフォンを使用した。機種名と設定内容は 下記の通りである。メイン・レコーダーは 2017 年のマン島とリバプールでは (2) を，2018 年のプレストンとブラッドフォードでは (3) を使用した。プラグイン・マイクとバックアップ・レコーダーはすべて共通の (4) と (5) である。

(2)　メイン・レコーダー（マン島，リバプール）: Roland R-26
　　録音設定:
　　トラック数: 2 (stereo)
　　サンプリング周波数 (sampling frequency): 44.1 kHz
　　量子化 (quantisation): 16-bit
　　データ保存形式 (Audio File Format): WAV

(3)　メイン・レコーダー（プレストン，ブラッドフォード）: SONY PCM-D100
　　録音設定:
　　トラック数: 2 (stereo)
　　サンプリング周波数 (sampling frequency): 44.1 kHz
　　量子化 (quantisation): 16-bit
　　データ保存形式 (Audio File Format): WAV

(4)　プラグイン・マイク:
　　SONY ECM-MS957（コンデンサー・マイクロフォン）
　　周波数特性: 50–18,000 Hz

(5)　バックアップ・レコーダー: TASCAM DR-08 (TEAC)

2.3 被験者

被験者は全員男性である。男性の方が地域方言を維持する傾向があるためである。できる限り高齢者の発音を収録しようと努力した。被験者番号の M は男性，数字は収録時の年齢を表す。

[2] Upton & Widdowson (*ibid.*) では，プレストンは R 音変種の地域となっているが，筆者のプレストンの被験者は 4 名中 2 名が非 R 音変種話者であった。等語線 (isogloss) 区域内であっても，方言地図では都市部を無視して解釈するのが一般的である。プレストンはランカシャーの州都なのでリバプール同様に都市部の揺れが見られる。

マン島の被験者を (6) に記す。マン島では北部と南部で方言が異なるので，北部と南部を分けて分析する。そのため，年齢の後に島内の出身地を明記し，(元の)職業の後に，ケルト系の「マン島語」(Manx) の保持の程度(質問票での被験者自身の回答に基づく)を記載する。流暢なマン島語話者も 2 名含まれており，母音のみならず，子音についても特徴があった。収録場所はすべて被験者の自宅である。

(6) マン島の被験者

北部

M1	68	Andreas	大工	some
M2	68	Kirk Michael	教員	some
M3	97	Sulby	警察官	slight
M4	56	Kirk Michael	建設作業員	slight

南部

M5	65	Rushen	自然環境管理人	some
M6	94	Ballachurry	農夫	fluent
	＜rhotic，母音の後の /r/ は単顫動音 (tap) の [ɾ]＞			
M7	52	Rushen	役場職員	fluent
M8	80	Port Erin	農場経営者	slight

リバプールの被験者を (7) に記す。リバプールでは 3 つの公立図書館で部屋を借りて収録した。市内の北部と南部を意識的に分けて回ったが，北部と南部という地域では母音にあまり差異がなく，それよりもリバプール方言 (Scouse) の訛りの強さで母音の音価に差が見られた。収録場所ごとに年齢，(元の)職業，訛りの強さ(質問票での被験者自身の回答に基づく)，つまり，訛りが「強い」(broad) か「軽い」(mild) かを示す。

(7) リバプールの被験者

アラートン図書館(南部)

M9	64	工場労働者	Broad
M10	54	無職	Mild

パークランズ図書館(南部)

M11	58	無職	Broad
M12	59	通信技師	Mild

ノリス・グリーン図書館(北部)

M13	69	警備員	Mild
M14	44	建設作業員	Broad
M15	49	司書	Mild
M16	65	司書	Mild

プレストンの被験者を (8) に記す。プレストンでは市内で最も大きいハリス図書館，および車で 15 分程離れたブラックバーン中央図書館で収録したが，被験者の出身地は全員プレストンである。来館者には移民が多く，地元出身者が少なかったために両図書館を 2 日間で 4 往復して 4 名の協力者を見つけた。

(8) プレストンの被験者

M17	37	レンガ職人
M18	50	トラック運転手 ＜rhotic＞
M19	67	教員 ＜rhotic＞
M20	76	ペンキ屋

ブラッドフォードの被験者を (9) に記す。ブラッドフォードでも公立図書館を数館回ったが，やはり移民が多く，地元の来館者は見つからなかった。やむを得ず，通りかかったテン・ピン・ボーリングの「ゴー・ボーリング」(Go Bowling) というボーリング場を訪ねて，支配人に協力を依頼し，地元出身の従業員を順に食堂へ呼んで収録した。年齢は若くなってしまったが，4 人の被験者の発音が均質的で，地域方言をよく保持していた。

(9) ブラッドフォードの被験者

M21	22	ボーリング選手
M22	38	ボーリング場技師
M23	30	ボーリング場支配人
M24	37	トラック運転手

3. NURSE 母音と SQUARE 母音の融合

リバプールおよびその周辺地域（マージサイド）の方言には「NURSE 母音と SQUARE 母音の融合」(the NURSE-SQUARE Merger) が見られる。特にそれはリバプール方言の特徴として有名である (Wells, 1982, p. 361)。2017 年のマン島とリバプールでの収録音声から NURSE 母音は *nurse*, *turn*, *perch* を，SQUARE 母音は *square*, *scare*, *wear* の母音を Praat version 6.1.02 (Boersma & Weenink, 2019) で分析し，各母音の F1（第 1 フォルマント）と F2（第 2 フォルマント）の周波数をプロットした F1-F2 ダイアグラム（散布図）を作成した。最初にリバプールと比較するのは同時期に共通の語彙リストで調査したマン島である。マン島には 19 世紀以降ランカシャーのヒーシャム (Heysham) とリバプールから定期船が就航し，ランカシャーの英語が伝わったようである。

マン島の被験者は北部（M1–M4）と南部（M5–M8）の 4 名ずつに分け（図 1，図 2），リバプールは被験者を「訛りが強い」3 名（M9, M11, M14）と「訛りが軽い」5 名（M10, M12, M13, M15, M16）に分けて比較する（図 3，図 4）。

図 1 と図 2 が示すように，マン島では NURSE 母音と SQUARE 母音の融合は生じていない。しかし，SQUARE 母音が「平滑化」(smoothing) して，単一母音になっている話者は北部にも南部にもいる。マン島では南部の方にマン島語の影響が強く残っている（子音の発音等に現れる）が，上記の図からも北部の方が SQUARE 母音の平滑化が進んでいることがわかる。また，SQUARE 母音を二重母音で発音している話者は，南部の方が前舌化していて，「わたり」(glide) も大きくなっている。

図 3 と図 4 から現在のリバプールでは訛りの強い話者のみならず，訛りの軽い話者にも，NURSE 母音と SQUARE 母音の融合が完全になされていることがわかる。図 3 の訛りの強い話者は 3 人全員が DRESS 母音を伸ばしたような[ɛː]を用いている。図 4 の訛りの軽いグループでは話者によって母音の音価がやや異なり，BBC 発音の NURSE 母音の音価[ɜː]から訛りの強い話者の発音のような[ɛː]の母音で融合している。「NURSE 母音の融合」とは言っても，労働者階級の訛りの強い発音の音価は BBC 発音の *nurse* には用いられない前舌半広母音の[ɛː]に収斂されていることは注目に値する。

図 1

NURSE 母音と SQUARE 母音の F1-F2 ダイアグラム 1__マン島北部 (Isle of Man_North)

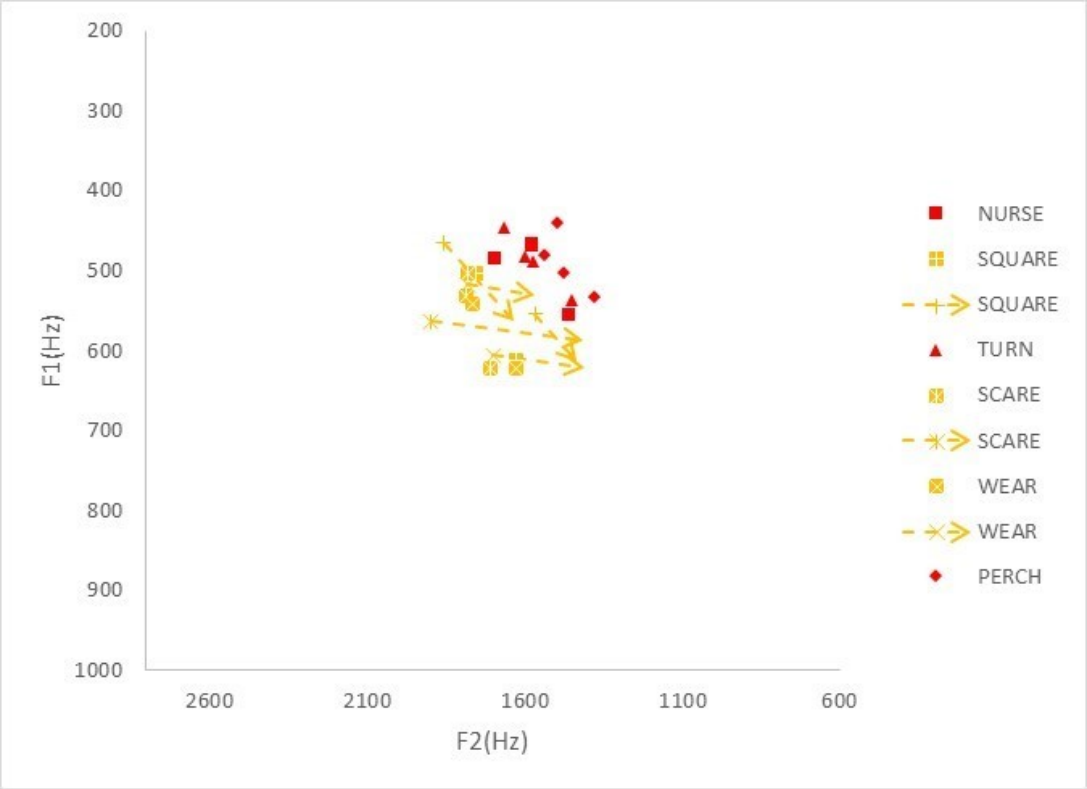


図 2

NURSE 母音と SQUARE 母音の F1-F2 ダイアグラム 2__マン島南部 (Isle of Man_South)

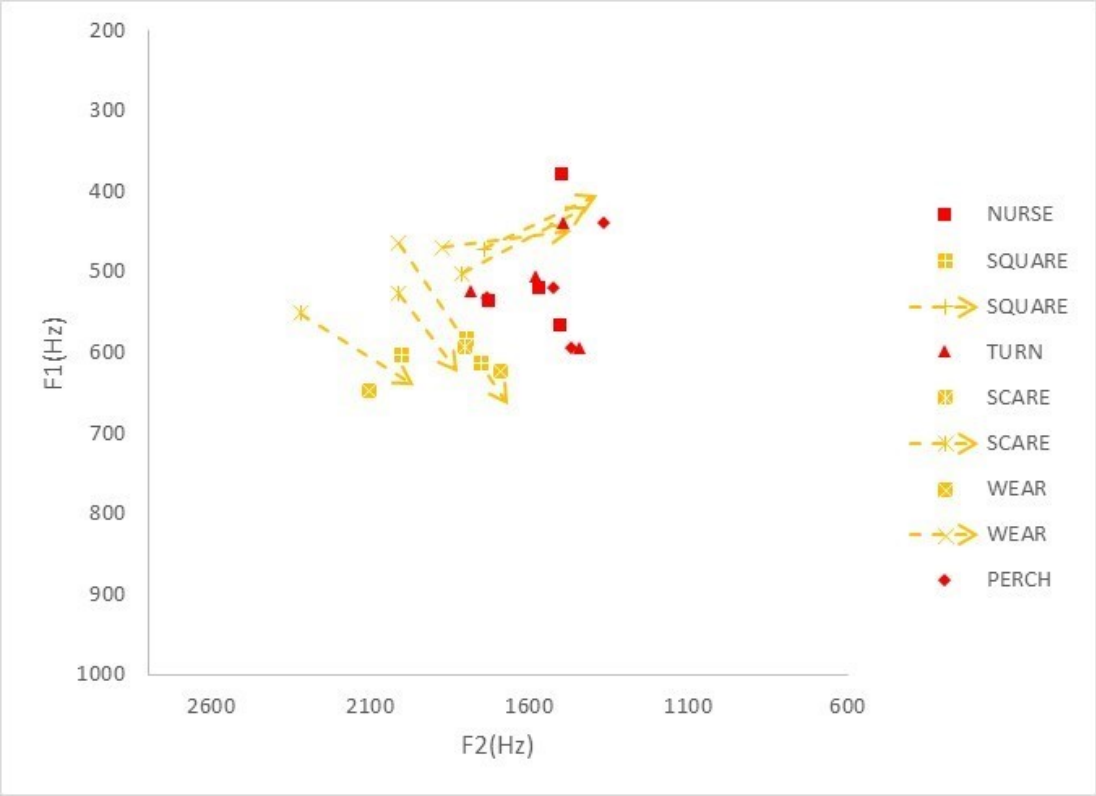


図 3

NURSE 母音と SQUARE 母音の F1-F2 ダイアグラム 3__強リバプール(Liverpool_Broad)

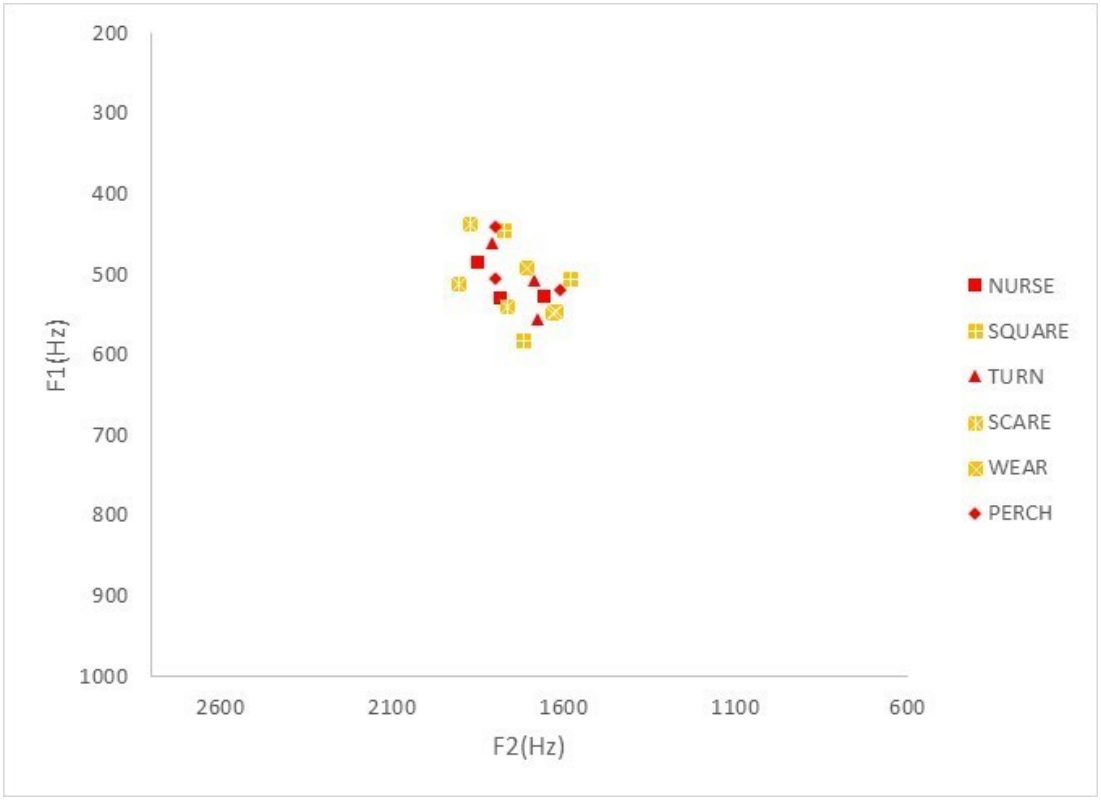


図 4

NURSE 母音と SQUARE 母音の F1-F2 ダイアグラム 4__軽リバプール (Liverpool_Mild)

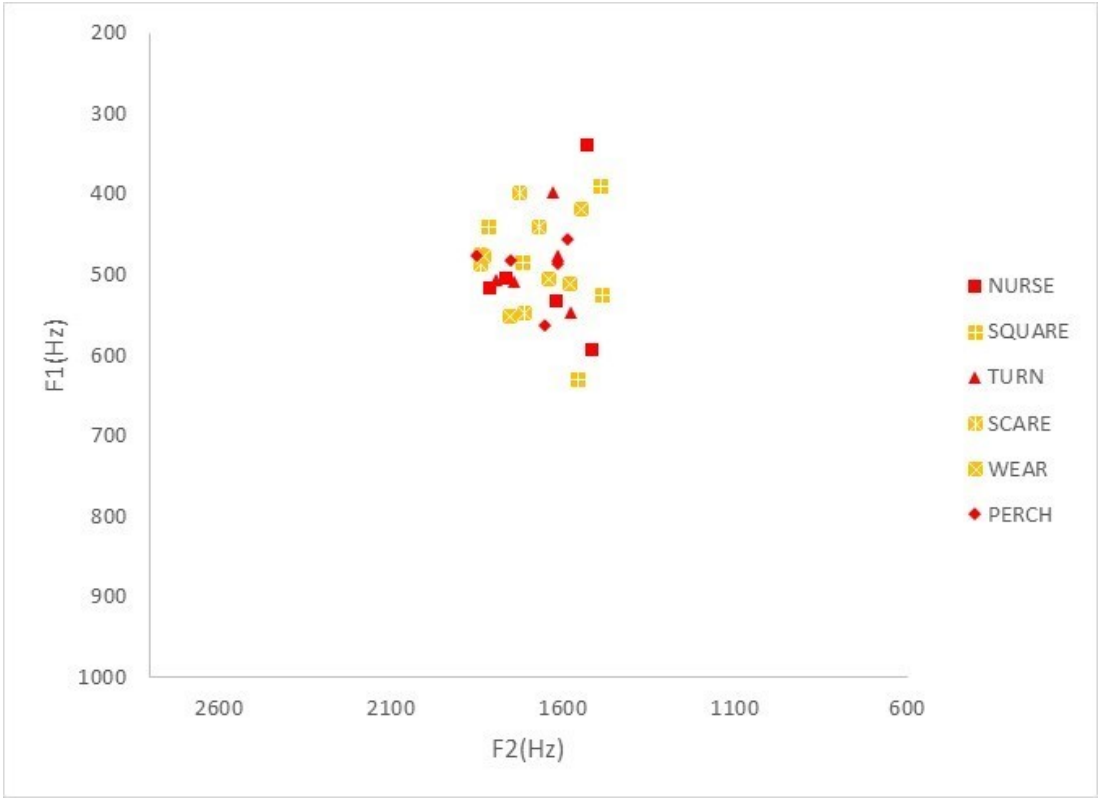


図 5

NURSE 母音と SQUARE 母音の F1-F2 ダイアグラム 5__プレストン (Preston)

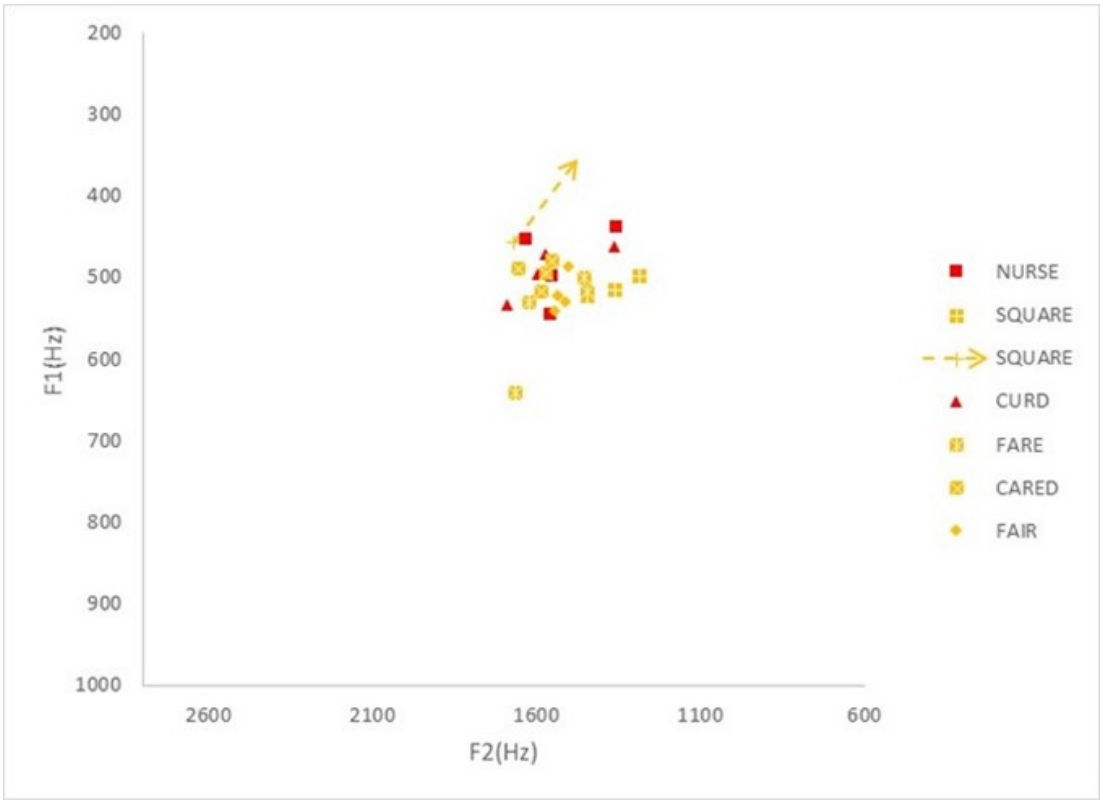
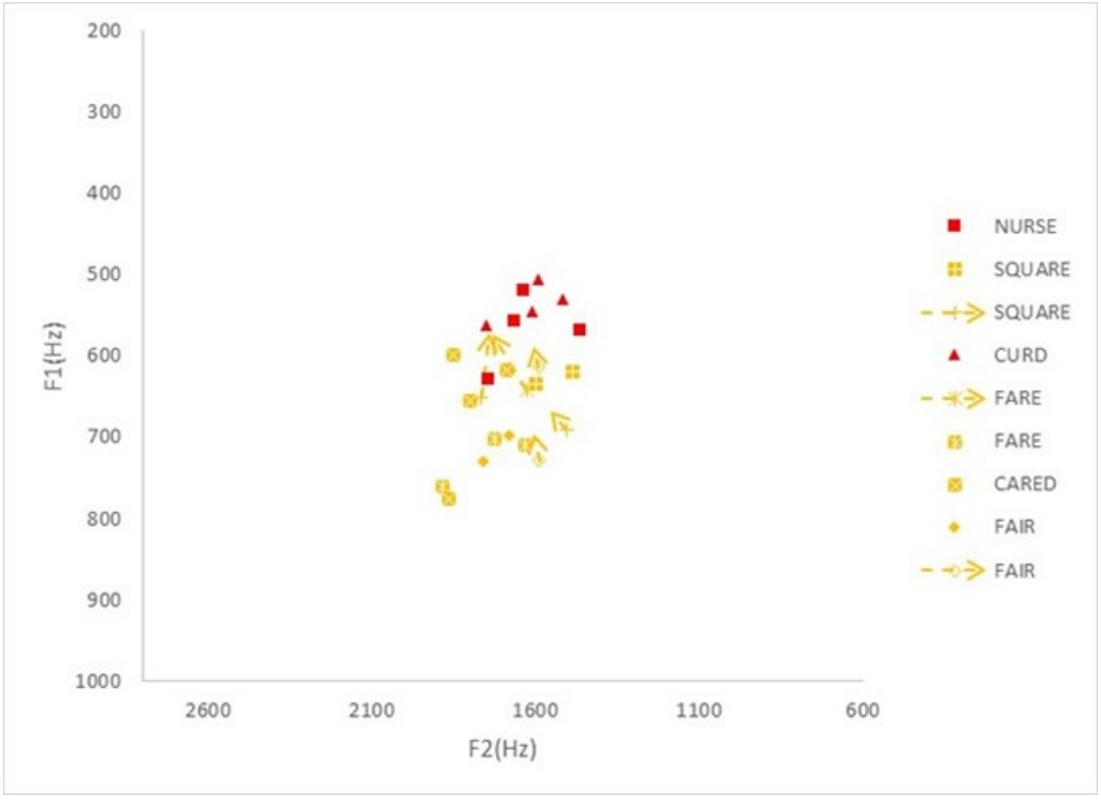


図 6

NURSE 母音と SQUARE 母音の F1-F2 ダイアグラム 6__ブラッドフォード (Bradford)



次に 2018 年の収録から NURSE 母音は *nurse*, *curd* を, SQUARE 母音は *square*, *cared*, *fare*, *fair* の母音を分析し, F1-F2 ダイアグラムを作って, プレストンとブラッドフォードの現状を調べた。プレストンを図 5 に, ブラッドフォードを図 6 に示す。

プレストンでは一人の被験者（M20, 76 歳）が *square* を二重母音で発音している。また, *fare* の F1 が 641 Hz で平均的な母音領域から離れているのも同じ話者である。他の 3 人の発音ではすべての母音がほぼ同じなので、高齢者に揺れが見られるものの、プレストンでも NURSE 母音と SQUARE 母音がほぼ融合していると言える（図 5）。Barras (2015, p. 275) はランカシャー南部にも NURSE 母音と SQUARE 母音の融合が見られると指摘しているが、その広がりはランカシャー中央部のプレストンにも及んでいる。

図 6 が示すようにブラッドフォードではその融合は見られない。しかし, SQUARE 母音はほぼ単一母音であって, 二重母音のように発音している話者の場合もその母音のわたりは非常に短い。NURSE 母音が [ɜː], SQUARE 母音が [ɛː] と対立する傾向が確認できる。

4. 単一母音としての SQUARE 母音と CURE 母音

上述のようにリバプールでは SQUARE 母音が完全に単一母音として発音されており, プレストンでも 4 名中 3 名（75%）が単一母音となっている。これに関連してリバプールでは CURE 母音も完全に単一母音となっていた。その上, CURE 母音が FORCE 母音と融合していた (三浦, 2018a, p. 24)。以後の考察のために, ここで調査地域 4 地点の二重母音を整理しておく。標準的な英語で二重母音として発音されている単語の F1-F2 ダイアグラムを作成して分析する。

リバプールとマン島の F1-F2 ダイアグラムでは, PRICE 母音には *eye* を使用した。語彙リストに *price* よりも持続時間が長い *eye* を含めていたためである。プレストンとブラッドフォードのダイアグラムでは, PRICE 母音に *prize* を, FACE 母音には *stay* を使用した。図 7 に訛りの強いリバプール発音を, 図 8 に訛りの軽いリバプール発音を提示する。なお, 図 7 と図 8 は三浦 (2018a, p. 23) からの再録である。本稿ではモノクロームではなくカラーとし, 図の一部を修正した。

図 7 と図 8 からリバプールでは SQUARE 母音のみならず, CURE 母音も被験者全員が単一母音として発音されていることがわかる。また, CURE 母音の音価が FORCE 母音と同じであることは, CURE 母音と FORCE 母音が完全に融合していることを示している。リバプールでは他の二重母音を単一母音として発音している被験者は一人もいない。FACE 母音も GOAT 母音も全く単一長母音にはなっておらず, FACE 母音の第 1 要素も非円唇前舌半狭母音である。

図 9 にマン島北部, 図 10 にマン島南部の二重母音を示す。なお, 図 9 と図 10 は三浦 (2018b, p. 41) からの再録である。SQUARE 母音が単一母音となっているのは, 北部では M2 と M4 の 2 名（50%）で, 南部では M5, M6, M7 の 3 名（75%）である。CURE 母音は南部の 1 名（M6）を除く全員が二重母音を維持している。M6 は 94 歳で, 英語を話していてもマン島語が混ざり R 音変種（/r/ は単顫動音 [ɾ]）の話者である。マン島では他の二重母音に単一母音は見当たらない。

図 11 のプレストンの二重母音では, 図 5 にも示したように SQUARE 母音に二重母音を使っているのは一人だけである。CURE 母音については M19 の一人だけが二重母音を使っていないが, この被験者は R 音変種の話者なので, 後ろに [ɹ] を発音している。FACE 母音 (*stay*) と GOAT 母音が興味深い。プレストンは距離的にはヨークシャーのリーズよりも, リバプールやマンチェスター (Manchester) に近いが, 4 名の被験者中 2 名（50%, M17 と M18）が二重母音ではなく, 単一長母音を使用している。CURE 母音同様に NEAR 母音を一人だけ単一母音で発音しているのは R 音変種の M19 である。M18 も R 音変種の話者であるが, これらの母音には[ɹ]を発音しなかった。語に応じて [ɹ] とシュワーの使い分けがなされるというのも興味深い。

図 12 のブラッドフォードの二重母音では 4 人の被験者全員が FACE 母音 (*stay*) と GOAT 母音を単一長母音として発音している。CURE 母音についても全員が単一長母音であるが, 一人だけ前舌化している。この被験者は M21 で, 22 歳と最も若い被験者であるが, その音価は BBC 発音も含めて全英に広がっている (Lindsey, 2019, p. 146, Vowel Chart) 前舌化した円唇母音[ɵː]である。

図 7
二重母音の F1-F2 ダイアグラム 1__強リバプール (Liverpool_Broad)

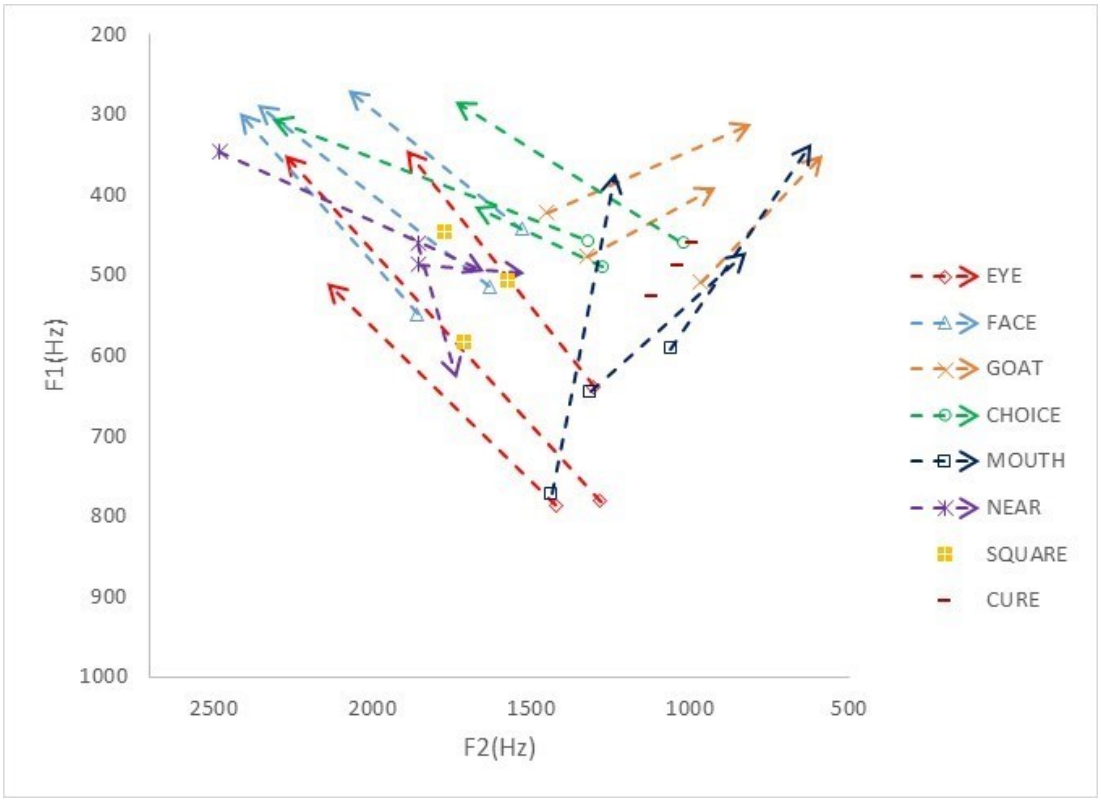


図 8
二重母音の F1-F2 ダイアグラム 2__軽リバプール (Liverpool_Mild)

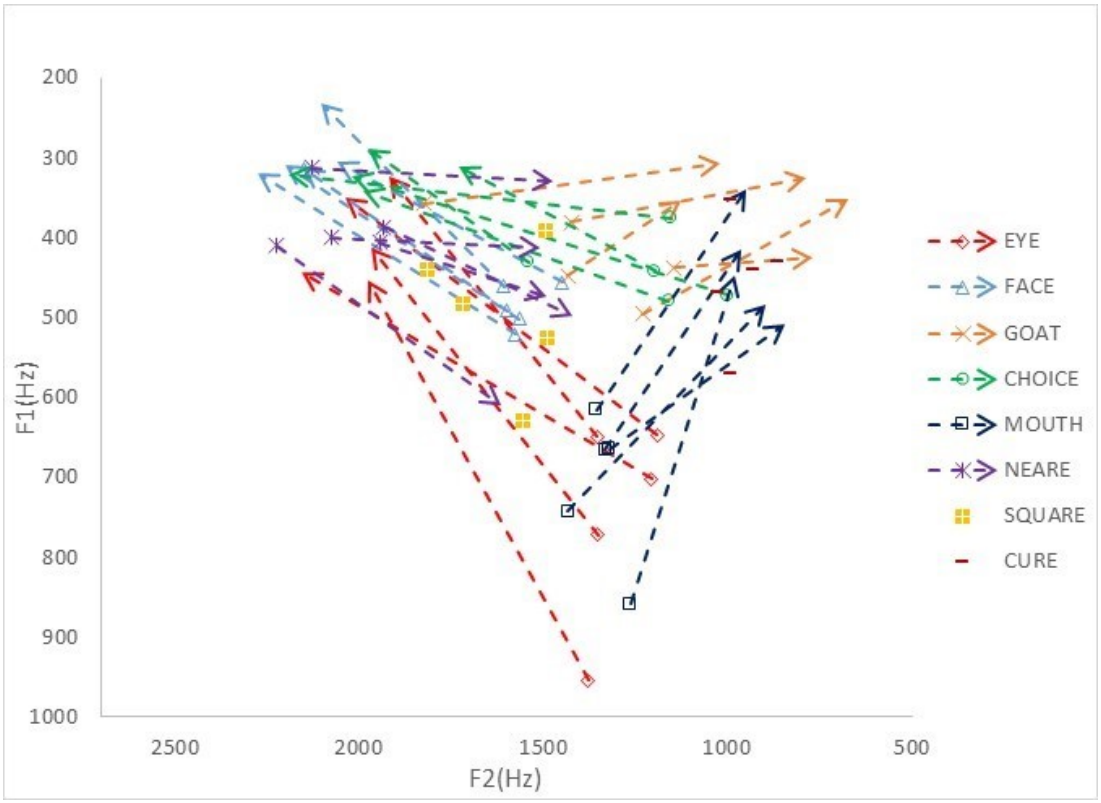


図 9

二重母音の F1-F2 ダイアグラム 3__マン島北部 (Isle of Man_North)

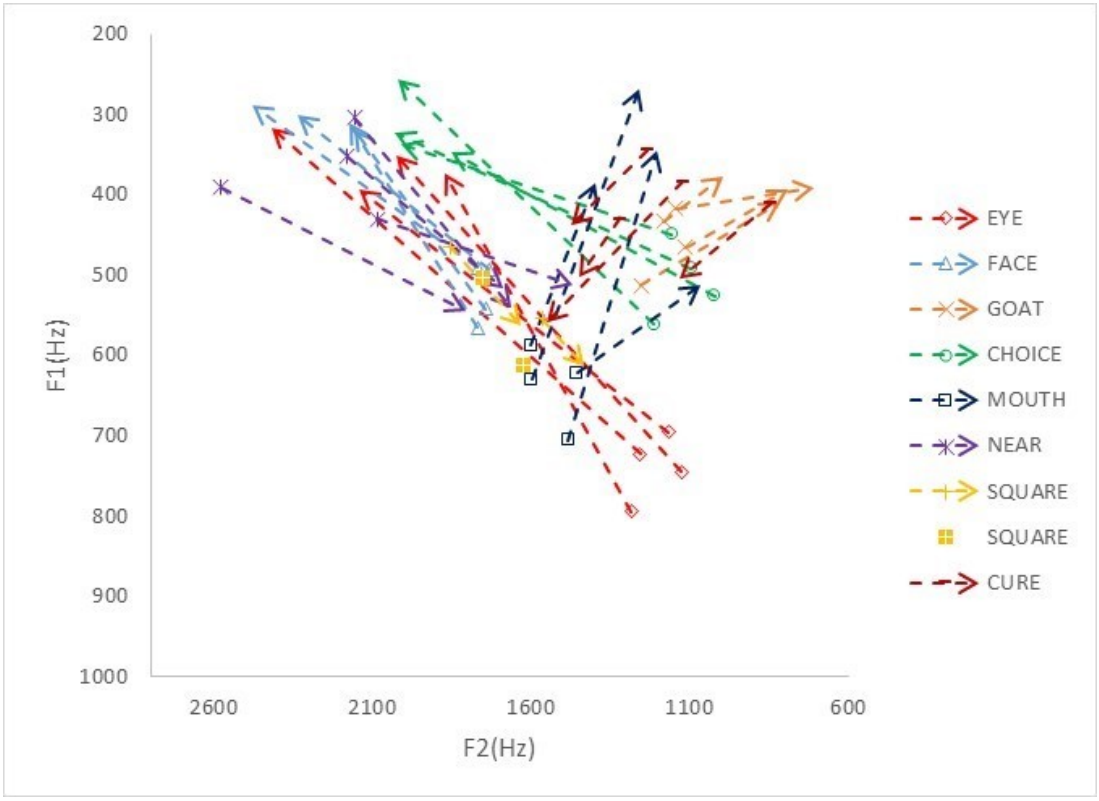


図 10

二重母音の F1-F2 ダイアグラム 4__マン島南部 (Isle of Man_South)

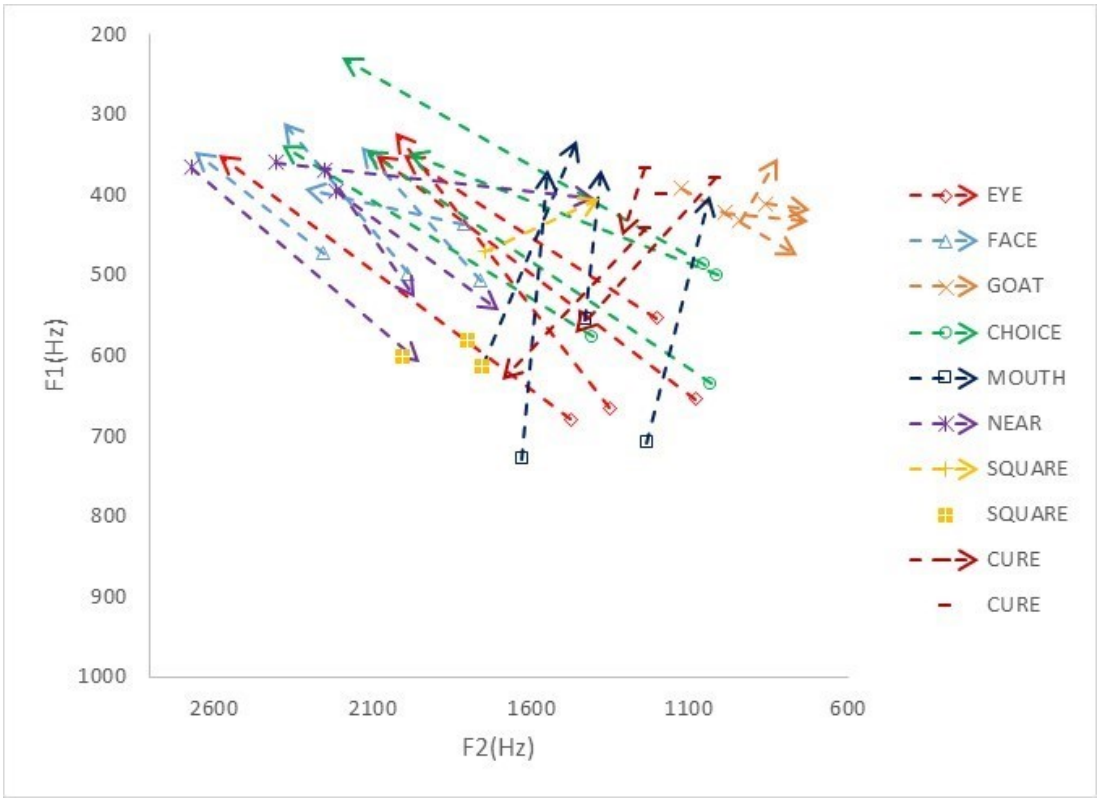


図 11

二重母音の F1-F2 ダイアグラム 5__プレストン (Preston)

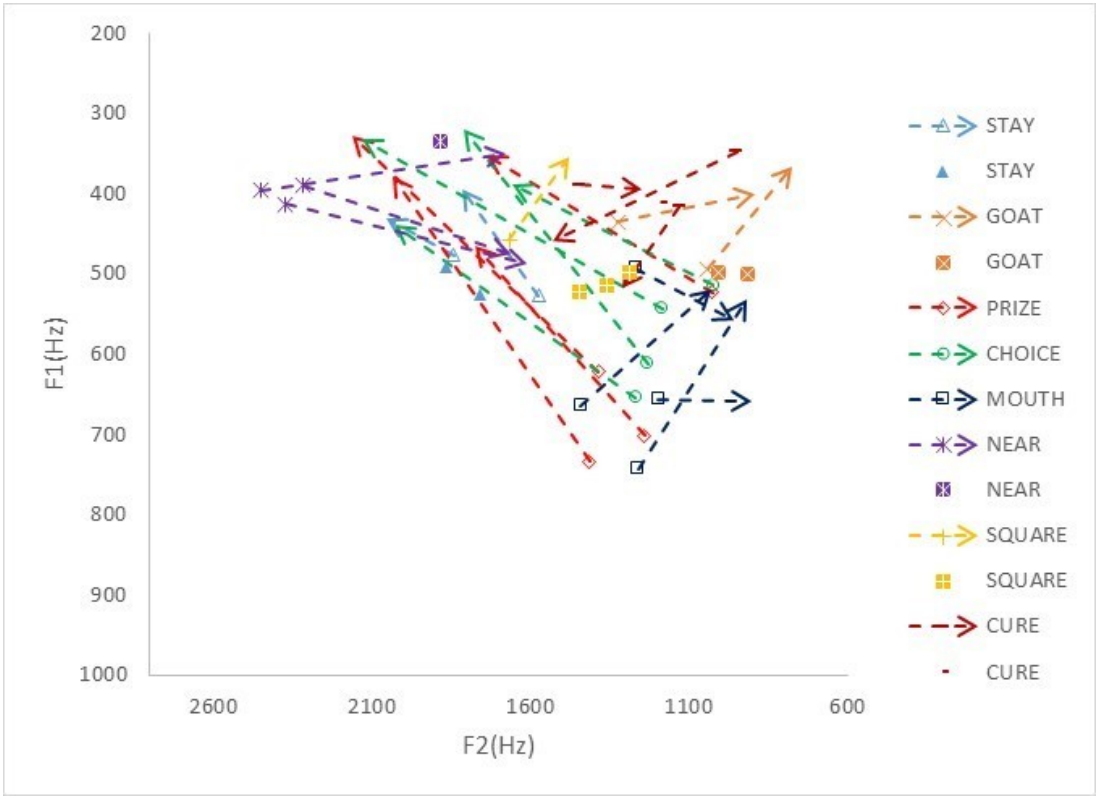
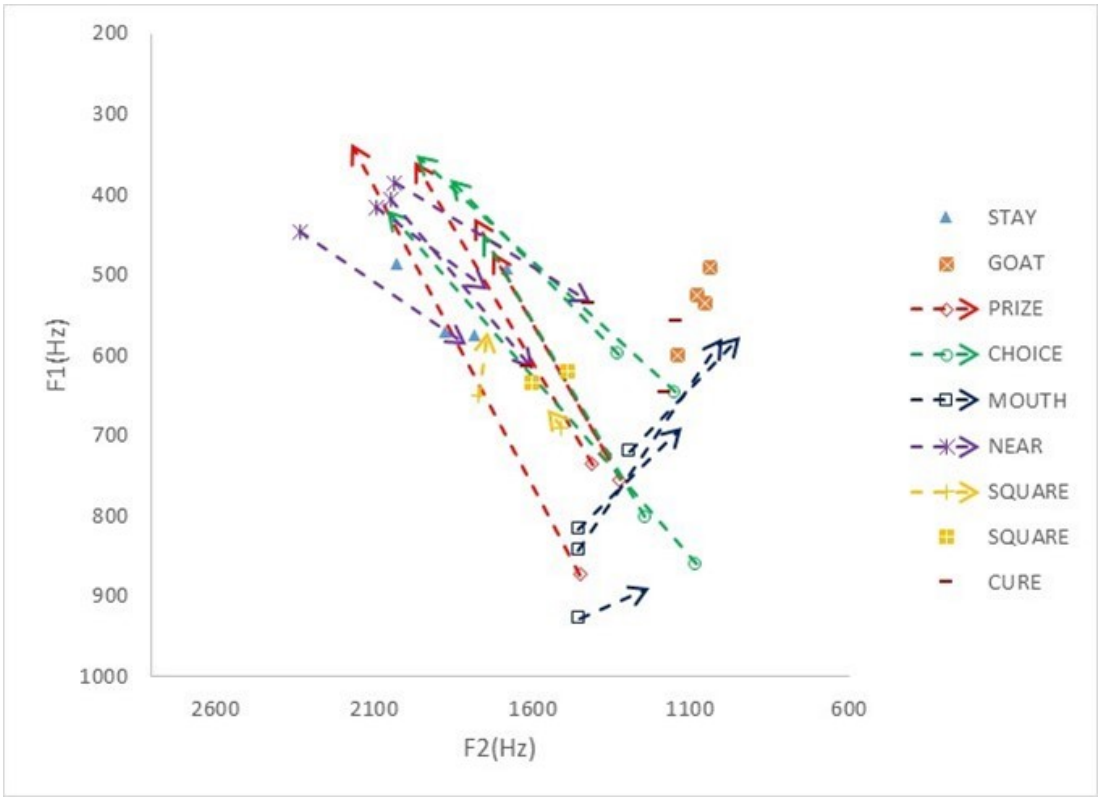


図 12

二重母音の F1-F2 ダイアグラム 6__ブラッドフォード (Bradford)



5. THOUGHT 母音と NORTH 母音と FORCE 母音の融合

Wells (1982, p. 373) は，リバプールにおいても CURE 母音が当時の RP（20 世紀の容認発音）の [ɔː] に置き換わりつつあることと，FORCE 母音の二重母音 [oə] が THOUGHT 母音 [ɔː] に融合することが広まっていると記述している。しかし，筆者の 2017 年の調査では，リバプールでは CURE 母音と THOUGHT 母音と NORTH 母音と FORCE 母音の 4 母音が円唇後舌半狭母音 [oː] で完全に融合していると感じた。その時の筆者の聴覚印象ではその母音は [ɔː] よりも狭い母音 [oː] であった[3]。

現在の BBC 発音でこれらの 4 母音が融合しているのは，「第 1 次 FORCE 母音の融合」(the First FORCE Merger) と呼ばれる変化，つまり FORCE 母音 [ɔə] が THOUGHT 母音と NORTH 母音の [ɔː] と融合して，さらに「第 2 次 FORCE 母音の融合」(the Second FORCE Merger) と呼ばれる CURE 母音の一部の語群がその母音に合流したためである (Wells, 1982, p. 287)。イギリスには第 1 次 FORCE 母音の融合さえ生じていない地域方言が多い。筆者の関心は融合した音価がリバプールでは一層狭い母音であるということである。BBC 発音でも THOUGHT 母音が狭母音化して，[oː] になる傾向があるので (Lindsey, 2019, p. 146)，狭母音化は現在の流行なのかもしれない。

本節では調査地点の THOUGHT 母音と NORTH 母音と FORCE 母音の音価を確認し，次節で NEAR 母音と比較しながら CURE 母音の考察を進めることにする。THOUGHT 母音と NORTH 母音と FORCE 母音の F1-F2 ダイアグラムの作成には，2017 年のリバプールとマン島での収録音声からは，THOUGHT 語群として *thought*, *thaw* を，NORTH 語群として *north*, *horses* を，FORCE 語群として *force*, *more* を選択して，本稿のためにダイアグラムを新たに作成した。2018 年のプレストンとブラッドフォードでの調査の際にはあらかじめ音読用語彙リストに目的の語を増やしておいた。したがって，THOUGHT 語群として *thought*, *saw*, *fought* を，NORTH 語群として *north*, *horse*, *for* を，FORCE 語群として *force*, *hoarse*, *four* という一層適切な語を使って図を作成することができた。

図 13 と図 14 はリバプールでの被験者の F1-F2 ダイアグラムである。リバプールでは筆者の聴覚印象通り，円唇後舌狭母音の調音位置でほぼ全員の母音が融合している。図 13 の訛りの強い被験者の一人（M14）の *north* の母音が F1: 660 Hz, F2: 1,117 Hz とリバプールのまとまっている母音領域からやや離れている。この被験者は *north* では非円唇母音として口の開きが大きくなっている。この発音はリバプールでは例外的であるが，図 18 のブラッドフォードでは標準的である。

図 15 のマン島北部の発音では，一人の被験者（M1）が *more* の母音を [oə] と，はっきりシュワーを発音しているが，それ以外のすべての母音はリバプール同様に円唇後舌半狭母音 [oː] で融合している。図 16 のマン島南部では，被験者 M8 の *more* がわたりの短い二重母音になっていること，および 3 人の被験者（M5, M6, M7）の *horses* が非円唇母音 [ɑː] で発音されていることが違反しているが，その他の母音はリバプール同様に後舌半狭母音 [oː] で融合している。

図 17 はプレストンの母音図である。まとまりのある母音領域はやはり後舌半狭母音 [oː] の周波数帯である。この図には *north* に 2 人の例外がある。F1: 490 Hz, F2: 1,790 Hz で発音している被験者は M17 で，‘th’ (/θ/) に [f] を用いて発音している。「TH 子音の前方化」(the TH Fronting) が生じている。あまり丁寧な発音ではない。もう一人の F1: 500 Hz, F2: 1,222 Hz の発音は M18 のもので R 音変種の話者である。この語では母音の後に [ɹ] が続いている。

図 18 からブラッドフォードでも THOUGHT 母音と NORTH 母音と FORCE 母音が融合していることがわかる。しかし，音価はリバプールとは異なり，後舌半広母音の [ɔː] である。

[3] PEPSJ 顧問のリンズィー先生 (Geoff Lindsey, UCL)，リバプールとマージー川を挟んだ対岸のウィラル (Wirral) 半島ご出身，にメールで問い合わせてみたところ，彼の説明ではリバプールを含むマージーサイドではご自身が子供の頃から，Wells (1982) の出版以前から，これらの母音は融合していたとのことだった。Wells (*ibid.*) の典拠 (Knowles, 1978) が古かったのかもしれない。

図 13

THOUGHT 母音と NORTH 母音と FORCE 母音の F1-F2 ダイアグラム 1
__強リバプール (Liverpool_Broad)

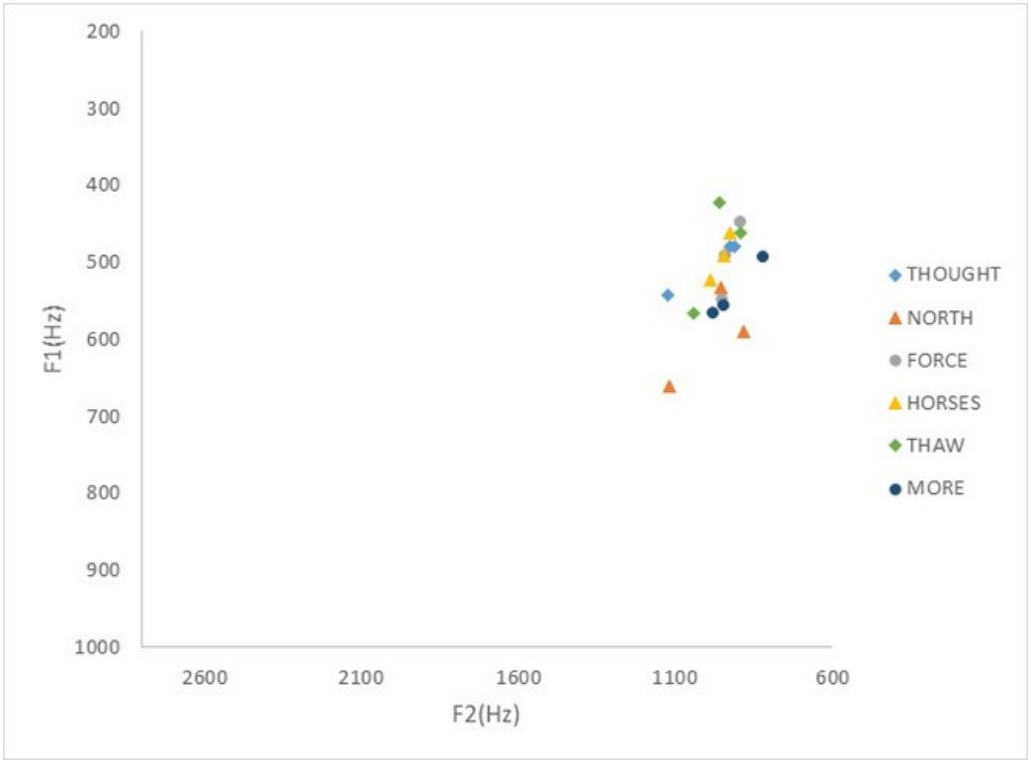


図 14

THOUGHT 母音と NORTH 母音と FORCE 母音の F1-F2 ダイアグラム 2
__軽リバプール (Liverpool_Mild)

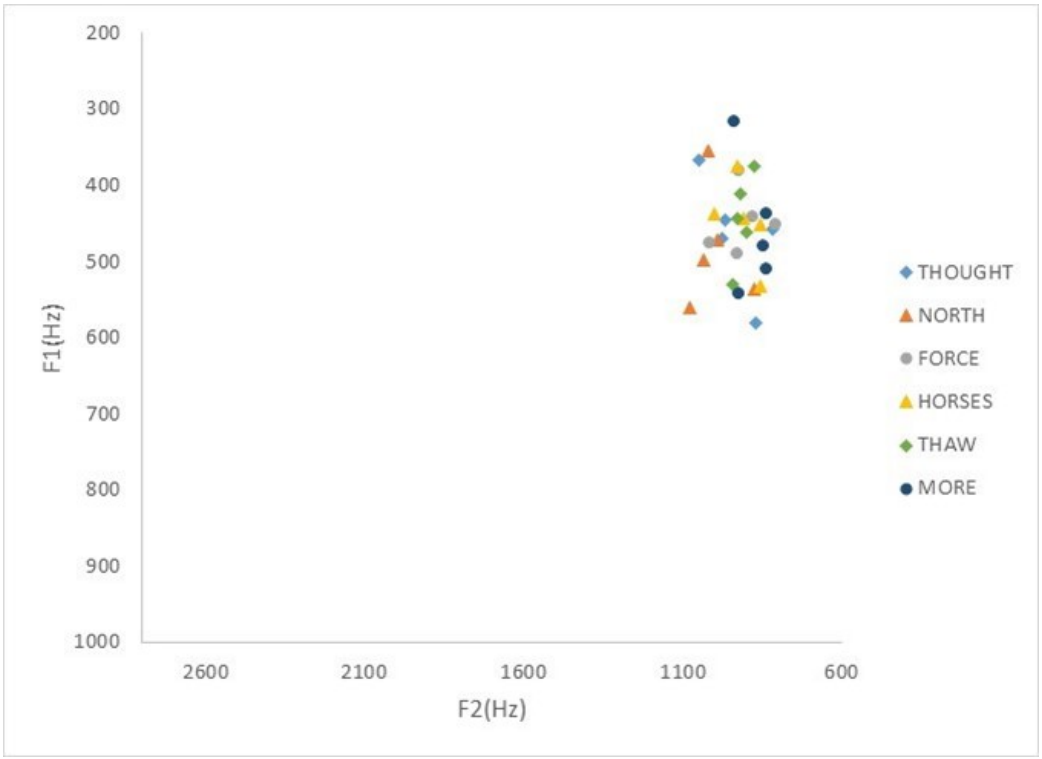


図 15

THOUGHT 母音と NORTH 母音と FORCE 母音の F1-F2 ダイアグラム 3 __マン島北部 (Isle of Man_North)

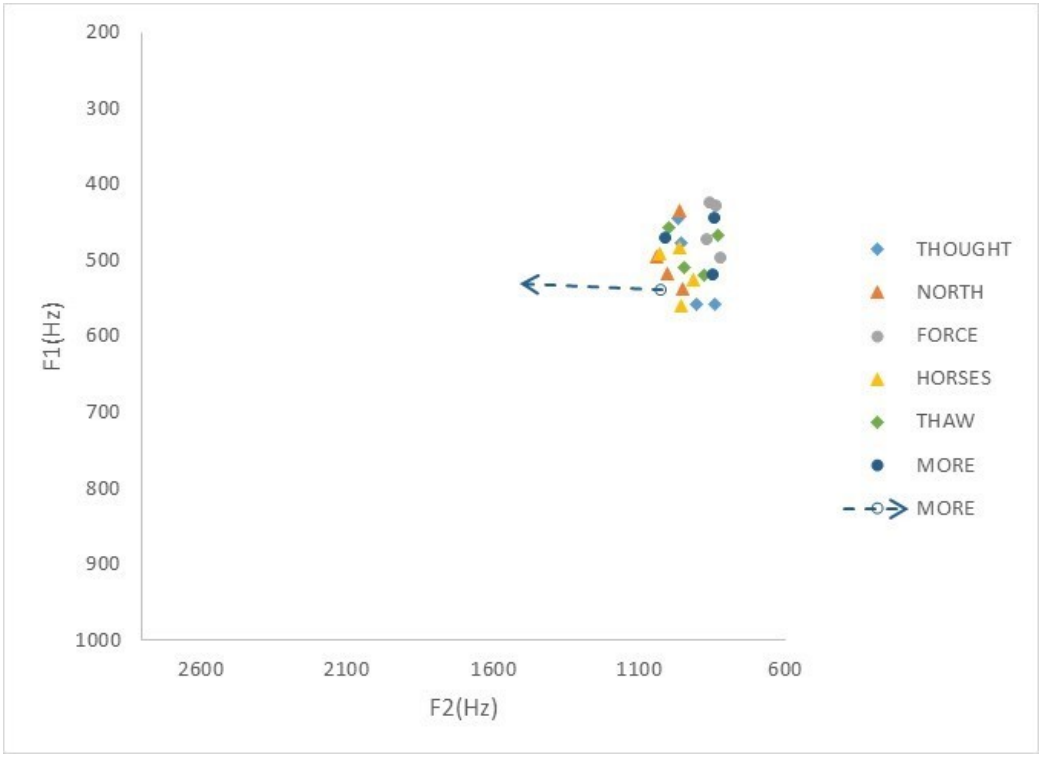


図 16

THOUGHT 母音と NORTH 母音と FORCE 母音の F1-F2 ダイアグラム 4 __マン島南部 (Isle of Man_South)

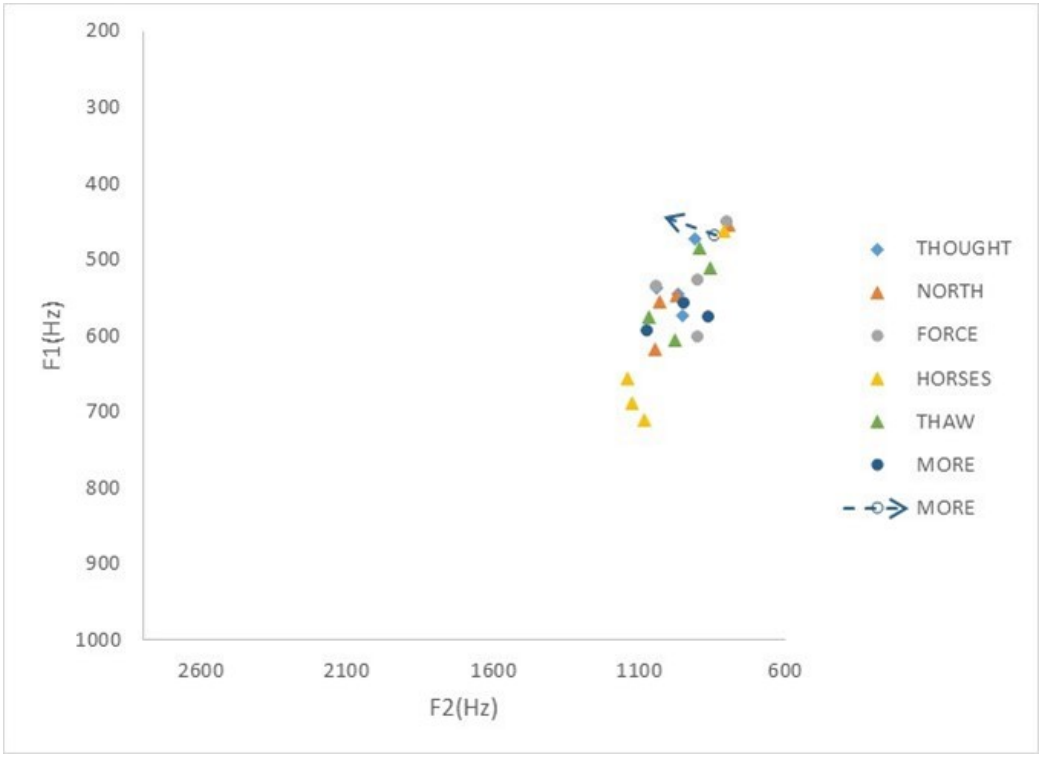


図 17

THOUGHT 母音と NORTH 母音と FORCE 母音の F1-F2 ダイアグラム 5

__プレストン (Preston)

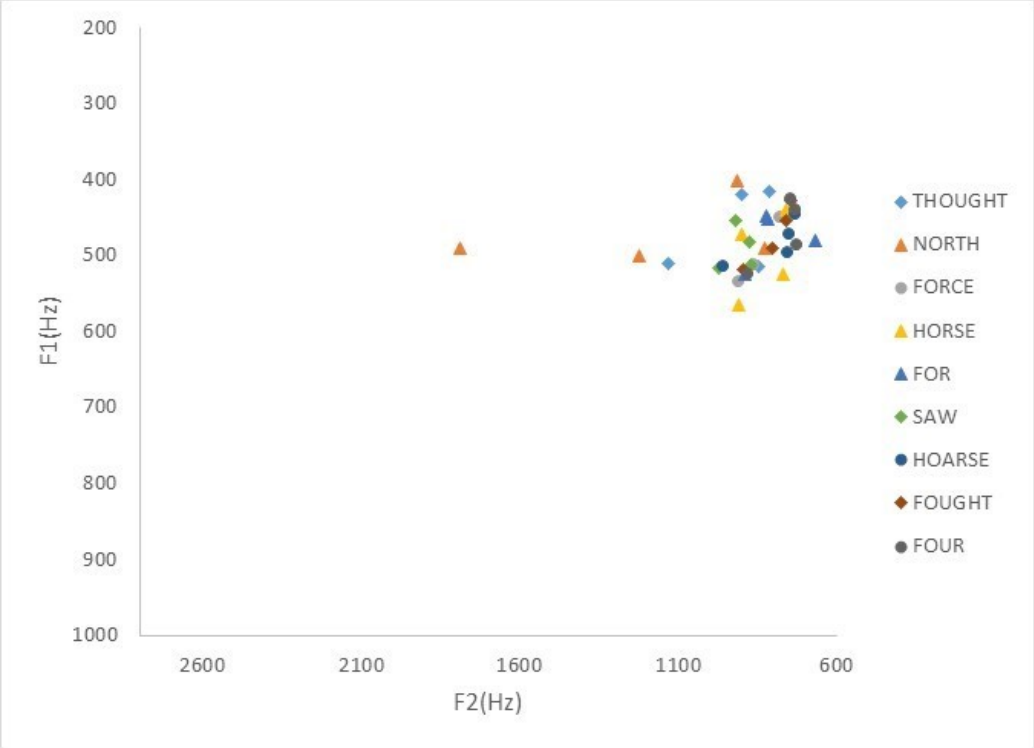
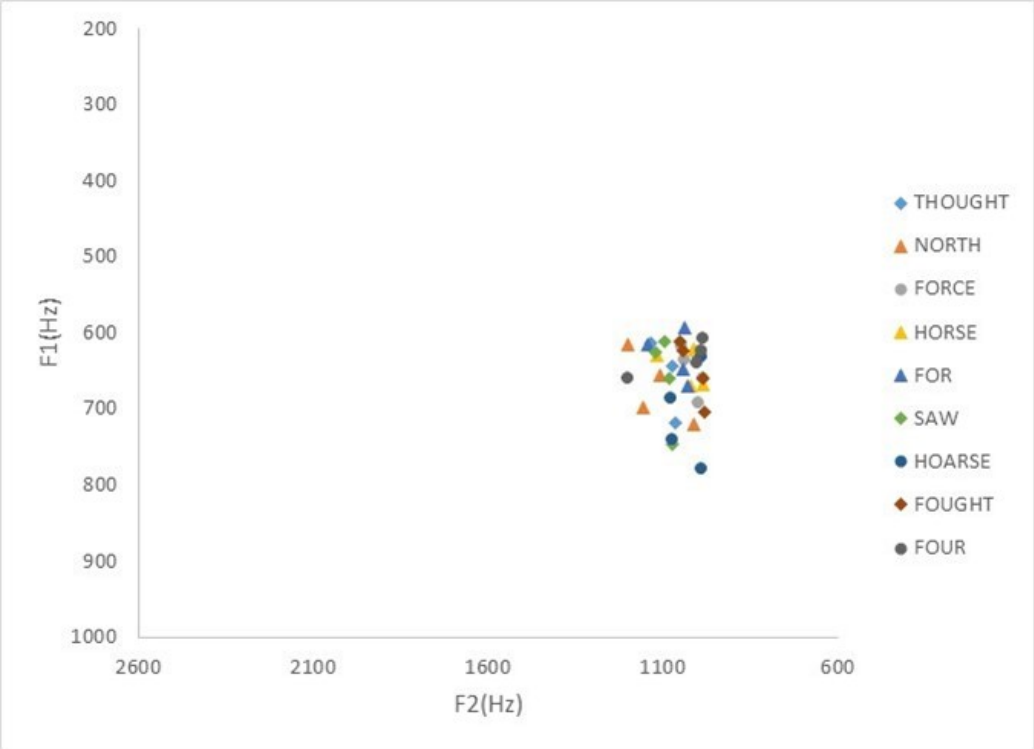


図 18

THOUGHT 母音と NORTH 母音と FORCE 母音の F1-F2 ダイアグラム 6

__ブラッドフォード (Bradford)



6. NEAR 母音と CURE 母音の音素変異

NEAR 母音と CURE 母音がイングランド北部英語の母音体系において重要な課題の 1 つであると気づいたのは，2017 年に実際に現地での調査を経験したためである。そこで 2018 年のプレストンとブラッドフォードでの調査の際には音読用語彙リストを改訂した。そのリストに，NEAR 語群から *near*, *beer*, *here*, *Korea*, *fierce* を，CURE 語群から *cure*, *pure*, *your*, *tour*, *sure* を加えて，プレストンとブラッドフォードでの音声収録を行うことができた。

Wells (1982, pp. 363–365) には，イングランド北部英語の 2 つの母音体系が論じられていて，リーズ英語では *near* と *cure* は二重母音ではなく，2 音節であって，イングランド北部の保守的な発音では，「歴史的 /r/」(historical /r/, 中英語の /r/ がシュワーに変わったもの) の前の母音は長母音になると説明されている。

しかし，「シュワーへわたる二重母音」(centring diphthong) が単音節か 2 音節かの判断は非常に難しい。連母音 (hiatus) であるとはっきりわかるような音声波形の途切れはないが，二重母音の第 1 要素としては持続時間が長いと感じる発音が多かった。また，近年では BBC 発音でもシュワーへわたる二重母音の第 1 要素が長くなっているから紛らわしい。母音ダイアグラムを見る前に，図 19 にブラッドフォードの被験者 M24 の *near* のサウンドスペクトログラムを表示する。

図 19
***near* のサウンドスペクトログラム＿ブラッドフォード (Bradford)＿M24**

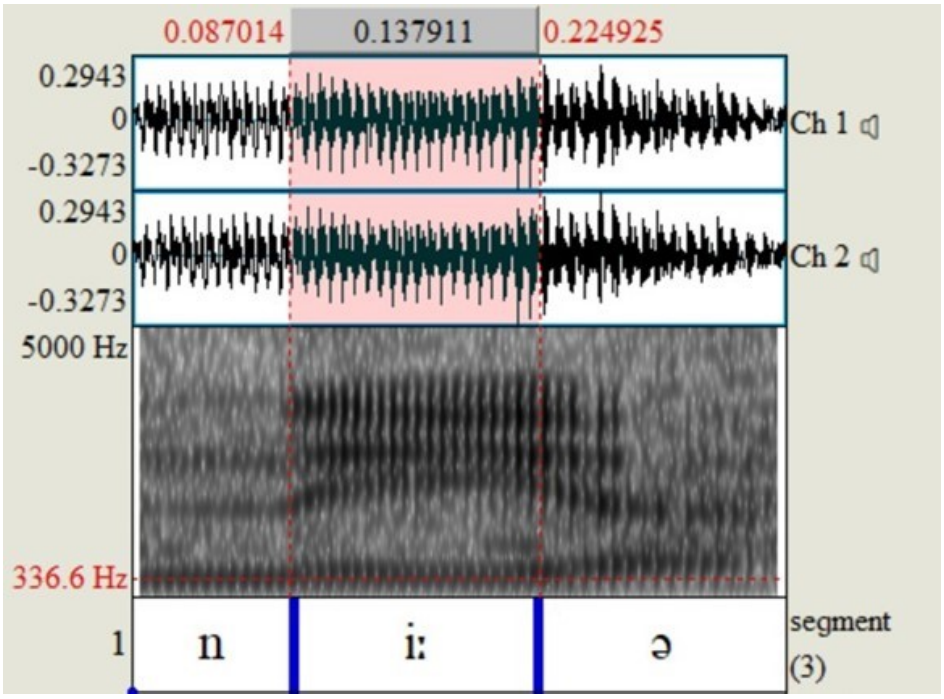


図 19 ではピンク色に表示されている部分が二重母音，あるいは連母音の第 1 要素である。138 msec という持続時間は長めなので，図中の音声記号には長音の補助記号を付した。/iə/ という二重母音ではないとは言い切れないが，これは /iːə/ という 2 音節の連母音であると聴覚印象も併せて判断する。第 2 要素のシュワーが短いことも印象的であるが，それはプレストンとブラッドフォードの R 音変種発音の話者すべてに共通するものである。NEAR 母音に関してはブラッドフォードの 4 人の被験者は均質的な発音，図 19 のような発音をしている。

被験者によって発話のテンポが異なるので，持続時間だけでは判断はできないが，参考として，表 1 にプレストンとブラッドフォードの被験者の NEAR 母音の第 1 要素の持続時間を，表 2 に CURE 母音の第 1 要素の持続時間を掲載する。

表 1

NEAR 母音の第 1 要素の持続時間（単位: msec）

	Preston			Bradford			Preston			Bradford	
near	M17	115		M21	120	*Korea*	M17	111		M21	112
	M18	113		M22	130		M18	85		M22	111
	M19	113		M23	153		M19	98		M23	127
	M20	149		M24	138		M20	141		M24	116
beer	M17	106		M21	119	*fierce*	M17	126		M21	99
	M18	115		M22	120		M18	114		M22	121
	M19	120		M23	149		M19	115		M23	122
	M20	160		M24	147		M20	130		M24	109
here	M17	91		M21	110						
	M18	100		M22	98						
	M19	102		M23	93						
	M20	159		M24	124						

表 2

CURE 母音の第 1 要素の持続時間（単位: msec）

	Preston			Bradford			Preston			Bradford	
cure	M17	57		M21	129	*tour*	M17	160		M21	164
	M18	119		M22	120		M18	130		M22	156
	M19	97		M23	124		M19	136		M23	249
	M20	120		M24	227		M20	83		M24	324
pure	M17	80		M21	155	*sure*	M17	86		M21	128
	M18	107		M22	160		M18	135		M22	172
	M19	115		M23	229		M19	103		M23	208
	M20	131		M24	195		M20	136		M24	319
your	M17	150		M21	147						
	M18	162		M22	154						
	M19	149		M23	220						
	M20	189		M24	254						

図 20

NEAR 母音の F1-F2 ダイアグラム 1__プレストン (Preston)

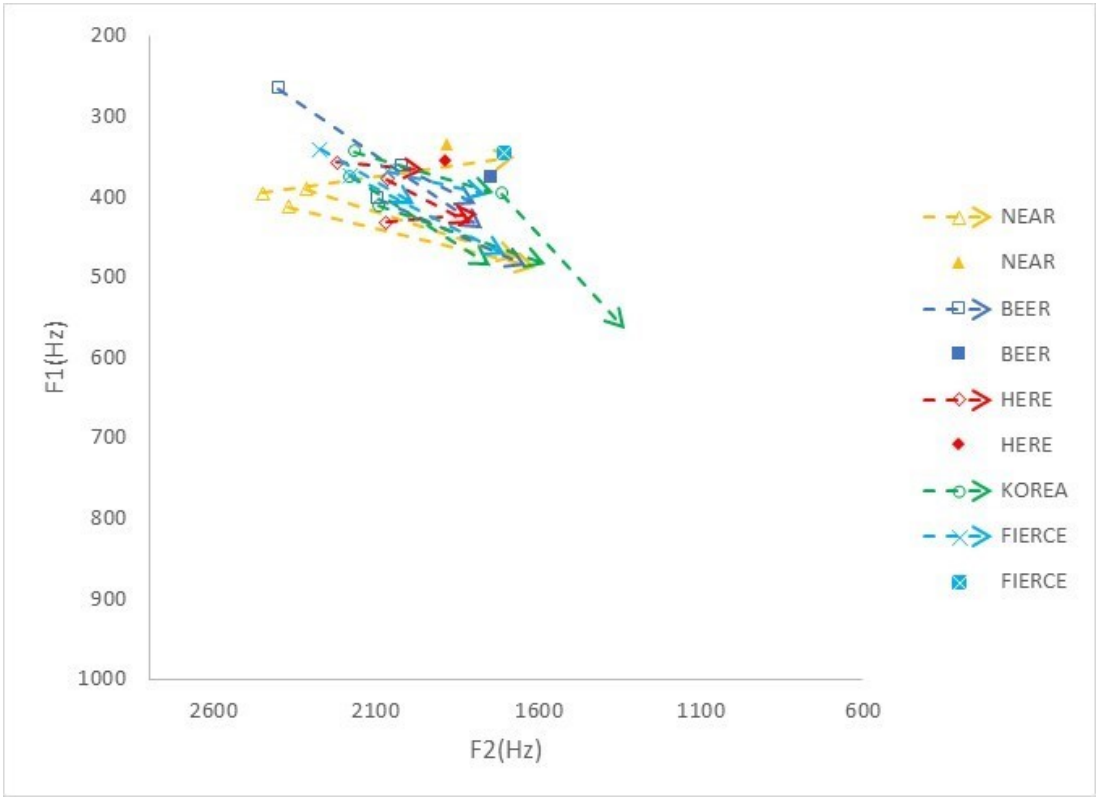


図 21

NEAR 母音の F1-F2 ダイアグラム 2__ブラッドフォード (Bradford)

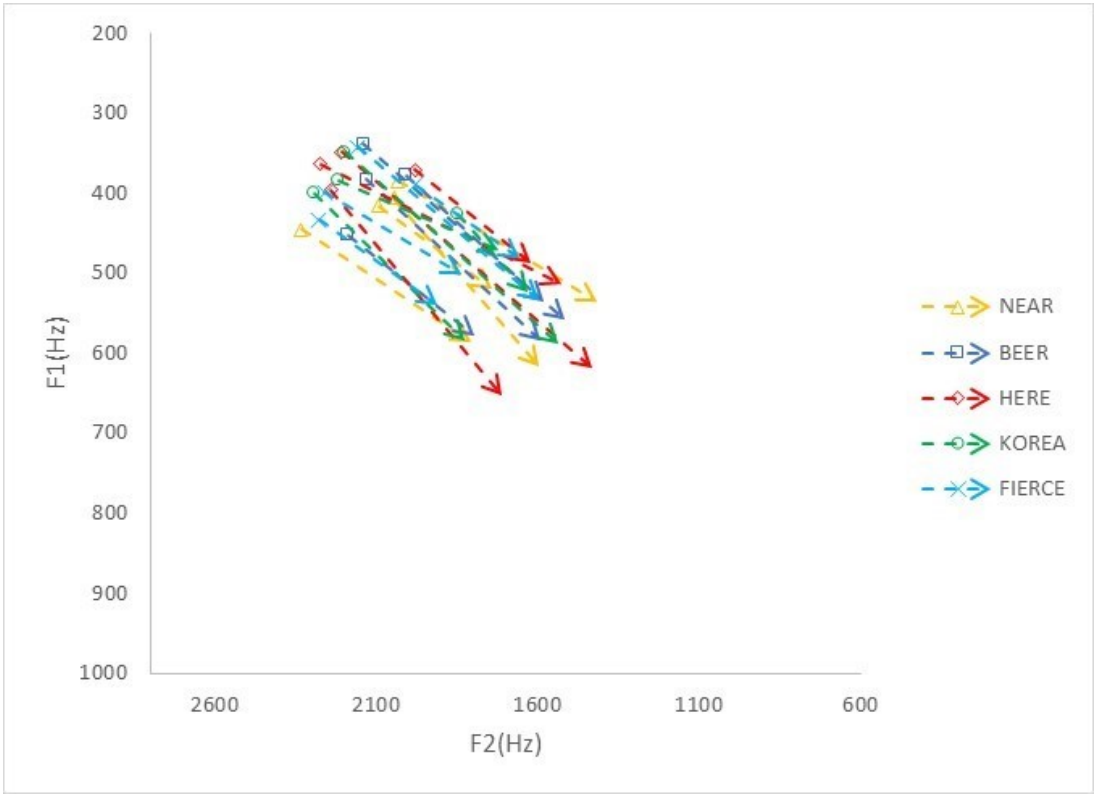


図 22

CURE 母音の F1-F2 ダイアグラム 1__プレストン (Preston)

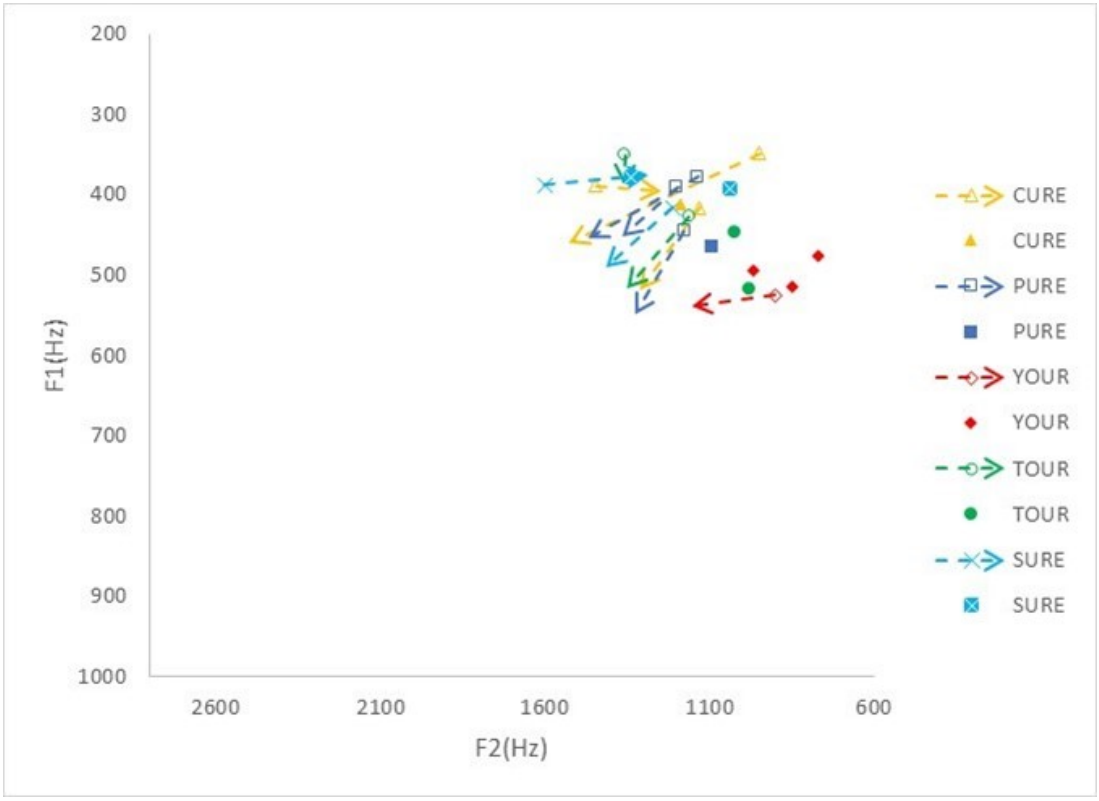


図 23

CURE 母音の F1-F2 ダイアグラム 2__ブラッドフォード (Bradford)

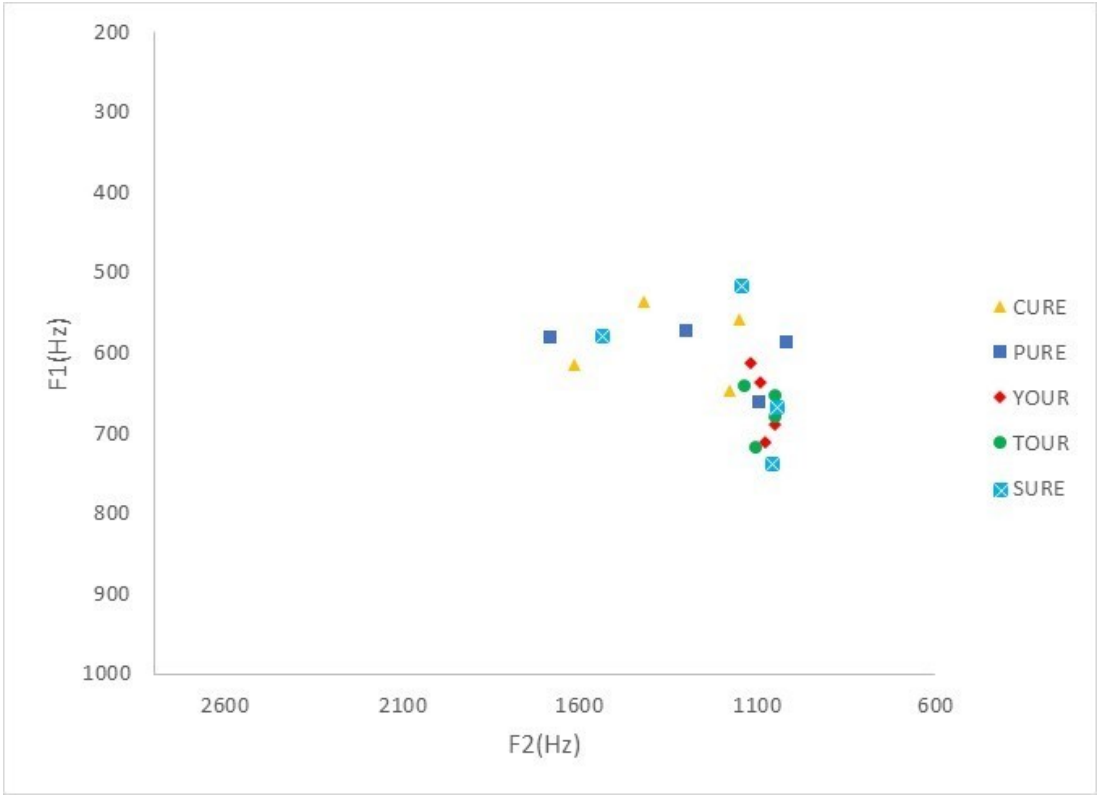


図 20 と図 21 は NEAR 母音の F1-F2 ダイアグラムである。図 20 のプレストンではすべての語に単一母音での発音が見られるが，それは R 音変種の話者 M19 一人だけである。二重母音が単音節か 2 音節かについては，聴覚印象でもやはり 2 音節であると思われる。したがって，プレストンの NEAR 母音の音素は /iːə ~ i(ɹ)/ である。図 21 を見るとすぐに気づくが，ブラッドフォードの NEAR 母音は見事なまでに音価が一致している。音素はすべてが 2 音節の /iːə/ である。

CURE 母音は図 22 と図 23 に示されている。図 22 のプレストンでは，*cure* と *pure* は R 音変種話者の M19 を除く 3 名が二重母音で発音している。M17 だけが単音節で，2 人は 2 音節のように聞こえる。他の 3 語では非 R 音変種の話者も二重母音の発音が少なくなり，[oː] になっている。プレストンの音素は /uːə ~ ʊə ~ oː ~ u(ɹ)/ である。

ブラッドフォードは図 23 のように，*cure* と *pure* で 2 人の被験者（M21, M24）が前舌化した中舌寄りの発音をしている。聴覚印象では /ʊə/ が不完全に発音されたような [ɜː] である。F1 が小さい高目の母音は [ɔː] で，F1 が大きい低目の母音は [ɑː] である。ブラッドフォードの CURE 母音の音素は /ɔː ~ ɑː ~ ɜː/ と言える。

7. おわりに

本稿では音素の融合と変異を基準として，イングランド北部英語の母音の特徴の一面を考察した。筆者が実際に現地調査した地域の現在の発音を分析して報告した。英語の発音変種にはその地域の英語の発達史が深く関与している。他言語との言語接触のみならず，社会的文化的な影響を受けた英語方言の変遷を探ることで，どうして現在の発音，その音素体系が成立したのかがわかる場合がある。引き続き音声の分析を続け，知見を広めながら，歴史的な調査をさらに加味して考察を深めたい。2019 年 9 月にはランカスターで音声収録を行った。同じランカシャーにありながら，プレストンとは異なる特徴が多々見られた。特に訛りの強い被験者からはランカシャー英語の特徴よりも各地の下層方言に共通する特徴の方が強く感じられた。これから詳細な分析を行い，改めて報告したい。

※本稿の第 6 節「NEAR 母音と CURE 母音の音素変異」は，日本実践英語音声学会 (PEPSJ) 第 3 回研究大会（2019 年 10 月 26 日，県立広島大学広島キャンパス）における口頭発表「イングランド北部英語における NEAR 母音と CURE 母音の音素変異」の内容を書き起こしたものである。

参考文献

Barras, W. (2015). Lancashire. In R. Hickey (Ed.), pp. 271–292.

Barry, M. V. (1984). Manx English. In P. Trudgill (Ed.), *Language in the British Isles* (pp. 167–177). Cambridge: Cambridge University Press.

Beal, J. (2004). English dialects in the North of England: Phonology. In E. W. Schneider et al. (Eds.), *A handbook of varieties of English, Vol. 1: Phonology* (pp. 113–133). Berlin: Mouton de Gruyter.

Beal, J. (2008). English dialects in the North of England: Phonology. In B. Kortmann & C. Upton (Eds.), *Varieties of English 1: The British Isles* (pp. 122–144). Berlin: Mouton de Gruyter.

Beal, C. J. & Cooper, P. (2015). The enregisterment of Northern English. In R. Hickey (Ed.), pp. 27–49.

Boersma, P. & Weenink, D. (2019). Praat: Doing phonetics by computer (Version 6.1.02) [Computer software]. http://www.praat.org/

Dobson, E. J. (1968). *English pronunciation 1500–1700* (2nd ed., 2 vols). Oxford: Oxford University Press.

Foulkes, P. & Docherty, G. (Eds.) (1999). *Urban voices*. London: Arnold.

Hamer, A. (2007). English on the Isle of Man. In D. Britain (Ed.), *Language in the British Isles* (pp. 171–175). Cambridge: Cambridge University Press.

Hickey, R. (2013). Supraregionalisation and dissociation. In J. K. Chambers & N. Schilling (Eds.), *Handbook of language variation and change* (2nd ed., pp. 537–554). Malden, MA: Wiley-Blackwell.

Hickey, R. (2015). The North of England and Northern English. In R. Hickey (Ed.), pp. 1–24.

Hickey, R. (Ed.) (2015). *Researching Northern English*. Amsterdam: John Benjamins.

Hughes, A., Trudgill, P., & Watt, D. (2012). *English accents and dialects: An introduction to social and regional varieties of English in the British Isles* (5th ed.). London: Routledge.

Juskan, M. (2017). Scouse NURSE and northern happY: vowel change in Liverpool English. In S. Hancil & J. C. Beal (Eds.), *Perspectives on Northern Englishes* (pp. 135–166, Chapter 7). Berlin: Mouton de Gruyter.

Knowles, G. O. (1978). The nature of phonological variables in Scouse. In P. Trudgill (Ed.). *Sociolinguistic patterns in British English* (pp. 80–90). London: Edward Arnold.

Lindsey, G. (2019). *English after RP: Standard British pronunciation today*. London: Palgrave Macmillan.

三浦弘 (2018a).「リバプール方言の最新の母音音価～社会階級を比較して～」『英語音声学研究』（日本英語音声学会中部支部学術論文集）*7*, 19–25.

三浦弘 (2018b).「マン島英語の母音～北部と南部を比較して～」『英語音声学』*23*, 37–46.

Prichard, H. (2015). The Great Vowel Shift in the North of England. In R. Hickey (Ed.), pp. 51-70.

Rawling, B. J. H. (2013). Yorkshire English. In T. Hopkins & J. McKenny (Eds.), *World Englishes, Vol. 1: The British Isles* (pp. 95–116, Chapter 3). London: Bloomsbury.

Russell, D. (2004). *Looking north: Northern England and the national imagination*. Manchester: Manchester University Press.

Thomson, R. L. (1984). Manx. In P. Trudgill (Ed.), *Language in the British Isles* (pp. 167–177). Cambridge: Cambridge University Press.

Thomson, R. L. (2000). Manx. In G. Price (Ed.), *Languages in Britain and Ireland* (pp. 58–69). Oxford: Blackwell.

Upton, C. & Widdowson, J. D. A. (2006). *An atlas of English dialects* (2nd ed.). London: Routledge.

Wales, K. (2006). *Northern English: a cultural and social history*. Cambridge: Cambridge University Press.

Watson, K. (2007). Liverpool English. *Journal of the International Phonetic Association, 37*(3), 351–360. https://doi.org/10.1017/S0025100307003180

Watson, K. & Clark, L. (2017). The origins of Liverpool English. In R. Hickey (Ed.), *Listening to the past: audio records of accents of English* (pp. 114–141, Chapter 6).

Cambridge: Cambridge University Press.
Wells, J. C. (1982). *Accents of English* (3 vols). Cambridge: Cambridge University Press.
West, H. F. (2015). Language attitudes and divergence on the Merseyside/Lancashire border. In R. Hickey (Ed.), pp. 317–341.
Windsor Lewis, J. (2018). The General Central Northern non-dialectal pronunciation of England (Section 7.4.). The home page of Jack Windsor Lewis. http://www.yek.me.uk/ (accessed 28.06.2018).

Vowel features of English accents in the North of England: A comparison between Liverpool, the Isle of Man, Preston and Bradford

Hiroshi Miura
Senshu University

Abstract

This paper reports on the present-day vowel features in four local accents of the North of England. All the data are from original recordings made on field trips in 2017 and 2018. (1) The merger of the lexical sets NURSE and SQUARE is observed in Preston as well as in Liverpool. The vowel of Preston and mild Liverpool accents is /ɜː ~ ɛː/ although that of broad Liverpool is /ɛː/. (2) The CURE vowel is all merged with THOUGHT-NORTH-FORCE in Liverpool, and the tendency spreads to the Isle of Man and Preston. The vowel of THOUGHT-NORTH-FORCE of Liverpool, the Isle of Man and Preston is /oː/ while that of Bradford /ɔː/. (3) The NEAR vowel is still disyllabic in Preston and Bradford, /iːə/, except a rhotic subject from Preston. (4) CURE words have variants of the vowel: /uːə ~ ʊə ~ oː ~ u(ɹ)/ in Preston, /ɔː ~ ɑː ~ ɜː/ in Bradford.